

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学

—Moks, adharmā-parvan 和訳研究 (XXXVI) 1—

茂木 秀 淳 信州大学教育学部

キーワード：プルシャ，第二十六，ダルマ，ブラフマン，プラクリティ

[295 章]² (B.307 章, C.11418-11465, K.312 章)

ヴァシシュタ仙は言った。

- (1) これまでサーンキヤの教義を汝に語った，すぐれた王よ。しかし今や私から知 (vidyā) と無知 (avidyā) について順序正しく聞くべし。(Cf. Johnston[1937]: akṣara in connection with vidyā, p.77.6)
- (2) 創造と帰滅の性質をもつ未顕現は無知であり，創造と帰滅を離れた第二十五は知である³と人々は言った⁴。(Cf. Hopkins[Great Epic]: avidyām āhur avyaktam, p.136.28)
- (3) 相互に無知 (であること)⁵，これを順序に従って聞くべし。このサーンキヤの教説を⁶聖仙たちによって，親愛なる者よ，述べられた通りに (聞くべし)。
- (4) あらゆる行為器官にとって知覚器官が知である，と伝えられている⁷。そしてもろもろの知覚器官にとって，特殊化したものたちが (知である)，というのが我々の伝承である。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXVI)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 8 号 (本号)) に続くものである。略号などは前稿参照。なお本号でのみ用いるものは下記のとおりである。

- Long[1980]: J. Bruce Long, The Concepts of Human Action and Rebirth in the *Mahābhārata*, Karma and Rebirth in Classical Indian Traditions, ed by Wendy Doniger O'Flaherty, University of California Press, Berkeley-Los Angeles-London, 1980, pp.38-60.
- Apte: V. M. Apte, The Practical Sanskrit-English Dictionary, Poona, 1957, Reprinted in Kyoto, 1978.
- 中村 [2000]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(下) 平楽寺書店 2000.

²この章には，第 3 - 8 詩節を除き，Edgerton の英訳がある。Cf. Edgerton[1965]: pp.313-316.

³P. sargapralayanirmuktam vidyām vai paçaviṁśakam B. sargapralayanirmuktām vidyām vai paçaviṁśakaḥ
K. sargapralayanirmukto vidyo vai paçaviṁśakaḥ

⁴このあとに K. は以下の行を挿入している。

ekatvaṁ ca bahutvaṁ ca prakṛter anu tattvavit /

(真理を知る者 (第二十五) には，プラクリティに従って，単一性と多数性とがある)

⁵P. parasparam avidyām vai B. parasparasya vidyām vai K. parasparam tu vidyām vai

⁶P., K.: sāmkyasyāsya nidarśanam B. sāmkyasyābhinidarśanam Cs. nidarśnam, niścitam jñānam /
(nidarśnam とは，確定的な知識である)

⁷karmendriyāṅām sarveṣām vidyā buddhīndriyaṁ smṛtam Ca. karmendriyāpekṣayā buddhīndriyāṅām prakāśakatvāt tadapekṣayā teṣām vidyātvam / (行為器官に関して，もろもろの知覚器官は照明するものであるから，それ (知覚器官) に依存することによって，それら (行為器官) には知の性質がある) Cv. vidyāsādhanatvāt vidyā / (vidyā は，知の達成手段であるからである)

- (5) その特殊化したものたちにとって、思考器官 (manas) が知である⁸、と賢者たちは言った。思考器官にとっては、五元素が知であると言われる (abhicakṣate)。
- (6) 自我意識が⁹五元素の (知である)。この点に疑いはない。そして自我意識にとっては統覚が¹⁰知である、人々の王よ。
- (7) 統覚にとって¹¹、未顕現であり、もろもろの原理の最高の支配者である¹²プラクリティが知であると知られるべきである。そしてこれが最高の規定 (vidhi) であると伝えられている。
- (8) 未顕現にとっては最高の第二十五が知である、と人々は言った。一切の知識にとって、一切の知識の対象 (jñeyam) が (知である)¹³、とされている、王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the twenty-fifth, Puruṣa, identified with vidyā, p.106.20)
- (9) 未顕現は知識であり、第二十五は知識の対象である¹⁴とされている。同様に、未顕現は知識であり、第二十五は認識者 (vijñātr) である。(Cf.MBh.XII.294.39, Edgerton[1965]: nature of knowledge, p.311,fn.1)
- (10) 知と無知の真実の意味を¹⁵、特に汝に対して私は述べた¹⁶。今や、不滅 (akṣara) と滅 (kṣara) とされるもの、それを私から聞くべし。
- (11) この (プルシャとプラクリティの) 両者は滅であり、そしてこの両者は不滅 (nakṣara) であると言われる¹⁷。この理由を、知られたところに従って正しく¹⁸述べるであろう。
- (12) この両者は無始無終であり、自在者と¹⁹考えられる。知識を考察する人々によって

⁸vidyām Cv. vidyā, vidyāviṣayatvād vidyā / (vidyā は、知の対象であるから知である)

⁹ahaṁkāraḥ Cs. ahaṁkāraḥ, tāmasāvidyā / (ahaṁkāraḥとは、タマスに属する無知である)

¹⁰buddhir Cn. buddhiḥ, mahattattvam / (buddhiとは、「大」という原理である)

¹¹P.,K.: buddheḥ B. vidyā

¹²P.,K.: parameśvaram B. parameśvarī

¹³sarvasya sarvam ity uktam jñeyam jñānasya Cs. sarvam iti, idaṁ sarvam yad ayam ātmeti (Bṛhad Upa.4.5.7) śrutya / (sarvamとは、このアートマンはこの世の一切である、という天啓聖典に基づいて言われている) Cs. jñānasya sarvapramāṇajanyasya, jñeyam jñātavyam / (jñānasya, すなわち、あらゆる認識手段によって生ずべきものの、jñeyam, すなわち、知られるべきもの、という意味である)

¹⁴P. jñeyam vai pañcaviṁśakam B.,K.: jñeyo vai pañcaviṁśakah

¹⁵P.,B.: vidyāvidyārthatattvena K. vidyāvidyārthatattvena Cn. vidyāvidyā, vidyāsahitā avidyā / arthatattvena, yāthārthyena / (vidyāvidyāとは、知を伴った無知である。arthatattvenaとは、対象のあるがままに、という意味である) Cs. vidyāvidyārthatattvena, sārāsārayoḥ svarūpāyāhātmyena / (vidyāvidyārthatattvenaとは、実体と非実体の自身の姿の本性として、という意味である)

¹⁶P. mayoktam B.,K.: mayoktā

¹⁷P. ubhāv etau kṣarāv uktāv etau ca nakṣarau B. ubhāv evākṣarāv uktāv ubhāv etāv anakṣarau K. ubhāv etau kṣarāv uktāv ubhāv etau kṣarākṣarau Cp. lokadṛṣṭyā ubhayor api akṣaratvam, śāstradṛṣṭyā tūbyayor api kṣaratvam / (世間的に見れば、両者は不滅であり、聖典によって見れば、両者とも滅である) nakṣarauについては、Oberlies[Grammar]: pp.359-360, na-compounds 参照。

¹⁸P. yathā khyātau tu tattvataḥ B. yāthātathyam tu jñānataḥ K. yathākhyāto na jānataḥ

¹⁹iśvarau Cs. paramātmā niravadhikeśvaraḥ, jīvas tu taddattasāmarthyād iśadiśvaraḥ / iśo varo yasmād iti vā iśvaraḥ / (最高我は限定のない自在者である。しかし個我は、それによって与えられた能力による小自在者である。あるいは、それによってすぐれた (vara) 支配者 (iśa) となる、ということからiśvaraである)

(jñānacintakaiḥ), この両者は原理 (tattva) という名称をもつ²⁰とされている。

- (13) 創造と帰滅の性質をもつ故に、人々は未顕現を不滅と言った。それは、グナ (guṇa 変異的存在) を創造するために、何度も変異するのである。
- (14) (プルシャとプラクリティはグナを) 相互に生じる²¹。大などのもろもろのグナを支配する故に²²、かくして人々はその第二十五を田地と言った。
- (15) しかし (田地が?) グナの網を、未顕現のアートマンの中に投げると (saṃkṣīpet)²³、第二十五はそれらもろもろのグナと共に帰滅する (vilīyate)。
- (16) もろもろのグナは、もろもろのグナの中に帰滅する²⁴。その時は、プラクリティが単一なものとして存在するであろう。知田者もまた、息子よ、田地の中に²⁵帰滅する時、
- (17) その時、グナと名づけられた²⁶プラクリティは不滅性にいたる²⁷。そして、もろもろのグナに戻らないので²⁸、ヴィデーハの王よ、グナのない状態にいたるのである。(Cf. Johnston[1937]: the beginning of the classical doctrine of merging of subordinate principles into prakṛti, p.76.14ff)
- (18) このようにこの地田者は、田地の知識が消滅すると、本性としてグナを離れるのである²⁹、と我々は聞いた。

²⁰tattvasamjñāv ubhāv Cp. ekasya puruṣasya svarūpasattayaiva tattvasamjñatvam, anyasya pradhānasya tattvādhyastatayā tattvam / (一方のプルシャは、本質の実在性によって、原理という名称をもつ。他方の第一原因は、原理として想定されているので、原理である)

²¹P. utpadyati parasparam B. utpattis ca parasparam B. utpadyante parasparāḥ

²²P., B.: adhiṣṭhānāt K.: adhiṣṭhānam Cn. parasparam adhiṣṭhānāt, cicchāyām anavāpya na kevalā prakṛtir vā, prakṛtirūpam upādhim anavāpya kevalaḥ puruṣo vā mahadādīn sraṣṭum utsahate, kiṃ tu parasparānugraheṇaivety arthaḥ / (parasparam adhiṣṭhānāt とは、精神の影を得ることなく、プラクリティのみがあるいは、プラクリティの本性である限定を得ることなく、プルシャのみが、大などを創造することができるのではない。そうではなくて、相互に補助することによって、という意味である)

²³yadā tu guṇajālaṃ tad avyaktātmani saṃkṣīpet N. guṇajālaṃ prakṛtyādi avyaktātmani ahamanubhāvāgocare śuddhe brahmaṇi saṃkṣīpet pravilāpayet yogī / (guṇajākam, すなわち、プラクリティなどを、avyaktātmani, すなわち、私という経験を領域としない清浄なブラフマンの中に、saṃkṣīpet, すなわち、ヨーガ行者が、消滅させると、という意味である)

²⁴līyante Cp. upādhilāye puruṣo 'pi līna iva bhavātīti kṛtvā puruṣasya kṣaratvam / prakṛteś ca svābhinnakāryākāraḥkṣaraṇāt / (限定が消滅するとプルシャもまた消滅したかのごとく存在する、と考えて、プルシャは滅する。プラクリティもまた、自分と異なる結果の形象が消滅するために (滅する))

²⁵kṣetre Cs. kṣetre, kṣetropalakṣitacaitanyātre / Cv. kṣetre saṃpralīyate, upacāyakarūpeṇa / (kṣetre とは、田地と呼ばれる精神のみの中に、という意味である) Cv. kṣetre saṃpralīyate, upacāyakarūpeṇa prakṛter bahir āyāti / (kṣetre saṃpralīyate とは、観察者 (? upacāyaka) の姿をとってプラクリティの外に達する、という意味である)

²⁶P., K.: guṇasamjñitā B. guṇasamśritā

²⁷tadākṣaratvaṃ prakṛtir gacchate B. は tadā kṣaratvam と読み、N. もその読みに沿った注釈を施している。N. tadā prakṛtir api kṣaratvaṃ vināśitvaṃ gacchate / (その時には、原質もまた kṣaratva すなわち滅性に至る)

²⁸P. guṇeṣu prativartanāt B., K.: guṇeṣu aprativartanāt Edgerton も aprativartanāt の読みを採っている (Edgerton[1965]: p.314, fn.1).

Cn. dehaguṇeṣu dehāśriteṣu śrotṛādiṣu prativiṣyaṃ vartataṃ tadabhāvāt / (dehaguṇeṣu とはすなわち、身体に依存する耳などにおいて、対象ごとに存在すること、それがないので) Cp. prativartanāt guṇeṣu mahadādiṣu prātikūlyena vartanāt / (prativartanāt とは、guṇeṣu すなわち、大などにおいて、反対の順序によって存在する故に、という意味である) Cs. aprativartanāt, asaṃsparśāt / (apativartanāt とは、接触しないために、という意味である)

²⁹prakṛtyā nirguṇaḥ Cv. prakṛtyā nirguṇaḥ, na tu svato guṇarahitaḥ / (prakṛtyā nirguṇaḥ とは、しかし自分から

- (19) プラクリティはグナをもつと³⁰認識し、自分はグナをもたない (nirguṇatva) と (認識する) 時、これ (知田者) は滅する者となる。
- (20) (知田者は) 覚醒して³¹「私とこれとは異なる」と認識する時、プラクリティの忌避によって³²清浄となる。
- (21) その時には、それ (地田者) は、別異性に至り、混合した性質に戻ることはないであろう³³。それは、プラクリティと混り合うことなく、(プラクリティとは) 別のものであると³⁴知られるのである、王の中のインドラよ。
- (22) しかしプラクリティの³⁵グナの網から逃れ、この上なき見者を見る³⁶時、(知田者は、それを) 見つつも悲しむことはないであろう³⁷。
- (23) 「これまで私は何をしてきたのか³⁸。魚が無知のために網に³⁹入るかのよう⁴⁰に、長い間 (kālam) この人 (の身体) に⁴¹従っている私は」
- (24) 「私は、あたかも魚が水を (別のものではないと) 知ることによって⁴²この世界で⁴³(水に) 従うかのよう⁴⁰に、迷妄のために、人 (の身体) から別の、そしてまた別の人 (の身

グナを離れるのではない、という意味である) prakṛtyā は、「プラクリティによって」か。また、nirguṇa は、「物質的性質を離れた」の意味か。

³⁰P.,B.: guṇavatīm atha K. guṇavatī mithaḥ

³¹buddhimān Cp. buddhimān, śāstrāhitavivekajñānaḥ / (buddhimān とは、聖典に述べられた区別知をもつ、という意味である)

³²prakṛteḥ parivarjanāt Cp. prakṛteḥ parivarjanāt, prakṛteḥ sakāśāt kṣaraṇāt, kṣaro bhavatīty arthaḥ / (prakṛteḥ parivarjanāt とは、プラクリティが眼前で滅することから、滅する者である、という意味である)

³³P. tadaiṣo 'nyatvataam eti na ca miśratvam āvrajat B. tadaiṣa tattvatām eti na cāpi miśratām vrajat K. tadaiṣā tv anyatām eti na ca miśratvatām vrajat Cn. tattvatām, āropaśūnyatām / (tattvatām とは、(他の性質の) 付託を欠いていることを、という意味である) Cs. miśratām, miśratmakatām, brahmarūpātām / (miśratām とは、混合を本性とする状態に、すなわち、ブラフマンの姿に、という意味である)

³⁴P. namiśro 'nyaś ca B. miśro hy anyaś ca K. miśro 'nanyaś ca Cf. Oberlies[Grammar]: na-compounds, pp.359-360

³⁵prākṛtaḥ Cs. prākṛtaḥ, manuṣyo 'ham ity abhimāninaḥ jugupsate, vijugupsate nindati / (prākṛtaḥ とはすなわち、「私は人間である」と自分のことを考える者を、jugupsate とは、すなわち、嫌う、非難する、と同義語である)

³⁶paśyate cāparaḥ paśyaḥ Cv. paśyate cāparaḥ paśyam, aparāḥ jīvād bhinnāḥ, paśyatīti paśyaḥ, sarvajño nārayaṇaḥ, taḥ paśyati / (paśyate cāparaḥ paśyam について、aparāḥ とはすなわち、個我とは別のものである。paśyati とは、paśyaḥ, すなわち、一切知者であるナーラーヤナ神が、それを見る、という意味である)

³⁷P. samjvaret B. samtyajet K. samsvajet

³⁸P.,B.: kiṃ mayā kṛtaḥ etāvad K. kim ahaṃ kṛtavān evaṃ K. はこの後以下の行を挿入している。

yadā matsyodakam jñānam anuvartitavāms tadā / (「魚と水 (は同一)」の知識に従う時)

³⁹jālaḥ hi Cn. jālaḥ hi, jālam iva / (jālaḥ hi とは、あたかも網に、という意味である)

⁴⁰P. anuvartitavāms tathā B.,K.: anuvartitavān iha Cn. anuvartitavān, hradād hradam matsya iva dehād deham / (anuvartitavān とは、魚が湖から湖へと逃げるように、身体から身体に移る、という意味である)

⁴¹imam janam Cn. imam prākṛtaḥ janam deham / (imam, すなわち、プラクリティに属する, janam, すなわち、身体に) Cp. janam, jāyamānaḥ śarīram / (janam とは、誕生しつつある身体である)

⁴²udakajñānāt Ca. udakajñānāt, aprthaktvena jñānāt / (udakajñānāt とは、(水は) 別のものではないと知ることによって、という意味である) Cn. idaḥ mama jīvanam iti jñānāt / (「これ (水) が私の命であるという認識によって、という意味である)

⁴³P. iha B.,K.: aham

体)に⁴⁴つき従ってきた⁴⁵。」

- (25) 魚は無知ゆえに(網を)水とは別であると考えない。それと同様に私は、無知のために、自分を(身体とは)別であると考えなかった⁴⁶。
- (26) 「無知な私が恥ずかしい。私は、迷妄のため、人から別の人へ、そしてまた別の人へと、繰り返し(輪廻に)沈んだこの⁴⁷人の後につき従ってきた。」
- (27) 彼(最高者)がここで友であるべし⁴⁸。彼と共に解脱に⁴⁹、(彼との)同一性、一体性に達して、私はあるべき姿になるであろう。(Cf.Hopkins[Great Epic]: ayam atra bandhuḥ, likeness with Lord-spirit, the twenty-sixth, in vv.27-40, p.133.30ff)
- (28) ここで私は(最高者との)同一性を見るであろう。私はまさしく彼と似ている。実に(hi)彼には汚れがない。私は、明らかに⁵⁰彼のようである。
- (29) 私は、無知による迷妄のため、執着をもつ知識なき者(ajñā)と共に活動してきた。しかし私は、今からは(kālam imaṃ tu)執着なく存在するであろう。
- (30) 私は、この時無知であったために、この女(anayā)に支配された。(今後)私は、どうして、上方、中間、下方の世界である彼女に住むことがあるうか。
- (31) この自惚れをもつ女(ブラクリティ)と⁵¹、私はどうしてここで共に住めようか。(共に住むのは)無知の状態から進むからである。今やこの私は確固としている⁵²。
- (32) この長い間の欺きのために、私は共に住まないであろう。なぜならば(yad dhi)変節なき私は(nirvikāra)、この変節する女によって⁵³欺かれていたからである。

⁴⁴anyam anyam janād janam Ca. janāt, janyamānād dehād, janam / (janāt とは、生まれつつある身体から, janam 人に、という意味である) Cs. janāj janam, jīvāj jīvam / (janāj janam とは、個我から個我に、という意味である) Cv. (reading anyam manye janājanam) janam bandhujanam, ajanam dhanakanakādikam / janās cetanāḥ, ajanāḥ jaḍās ca yasmāt tam paramātmānam vā / (janam とは、親戚の人であり, ajanāḥとは財産や金などである。あるいは janāḥとは、意識であり, ajanāḥとは、物である。それらから, tam, すなわち、最高我は(別であると私は考える), という意味である)

⁴⁵P. anuvartitavān iha B.,K.: anuvartitavān aham

⁴⁶vedmy aham Cn. na vedmīti naśabdānukarṣeṇa yoḥyam / (na vedmi というように, (d 句の vedmi に b 句の nābhimanyate の) 先行する na の語の引き寄せによって, 結びつけられる)

⁴⁷P.,B.: magnam imaṃ K. ajñā imaṃ

⁴⁸ayam atra bhaved bandhur Cp. ayam, jagadīśvaraḥ / (ayam とは、世界の支配者を指している) ayam の解釈として, Deussen: Dieser [Ātman] (p.631, v.27), Ganguli: The Supreme Soul (p.26.14) Edgerton[1965]: This (true Self) (p.315, v.27)。

⁴⁹P. mokṣaṇam B.,K.: me kṣamam

⁵⁰P.,B.: vyaktam K. 'vyaktam

⁵¹P.,B.: samānayāyā ceḥa K. samānayā na yāceḥa Cp. samānayā, mānena ahaṃkāreṇa saha vartamānayā / (samānayā とは, māna, すなわち, 自我意識, と共に活動している彼女と, という意味である)

⁵²eṣedānīm sandhi 規則によって分解すると eṣā idānīm となるが, そうすると, 女性形 eṣā のため, 文脈からはブラクリティを指すことになり意味をなさない。eṣā idānīm の double sandhi と考えられる。(Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8 Double sandhi, 1.8.3, -e- < / -as i-/, p.35.8 N. eṣedānīm iti pādapūraṇārthaḥ sandhiḥ / (eṣedānīm は, 詩節の一行を満たすための連声である)

⁵³vikārayā Cp. vikārayā, vikārasvarūpayā / (vikārayā とは, 変異を本性とする者によって, という意味である)

- (33) しかしこれはこの女の過失ではない。これは私の過失である。私が顔を背けて(この女に)近づき⁵⁴, この女に執着したのである。
- (34) それゆえ、形なき私は多くの姿の⁵⁵形あるものたちの中に存在した。そして形なき私が形をとった時に (mūrtātma), 所有意識に (mamatvena) 襲われたのである。
- (35) プラクリティの悪しき所業のために⁵⁶, この世界のそれぞれの母胎において, 所有意識なき私 (nirmamasya) が, 所有意識によって何を為したか。もろもろの母胎に存在し, 知性をなくした心 (naṣṭasaṃjñena cetasā) によって, 何を為したか。
- (36) この世では, この女と共になすべきことは私にはない。自我意識によって作られた本性をもつこの女は, 自らを多様にした後⁵⁷, 私をさらに (輪廻に) 結びつける⁵⁸。今やこの私は覚醒し, 所有意識もなく自我意識もない。
- (37) 私は, 常にこの女によって, 自我意識を通して作られた本性をもつ所有意識を離れ, この女を捨てて, 病なき者に⁵⁹避難するであろう (saṃśrayiṣye)。
- (38) 私は, この者と等しくなるであろう。この意識なき女とは (等しく) ならないであろう。私はこの者と一緒になるのが適当であり, この女とは一体となることはないであろう。このように最高者の認識によって第二十五は⁶⁰覚醒した。
- (39) 滅を捨てて, 病なき, 不滅のものに結びつくべし⁶¹。未顕現が顕現の性質をもつのを⁶²見, グナなき者 (nirguṇam) がグナをもつ (saguṇa) のを見, グナなき者を第一と

⁵⁴parānmukham upasthitaḥ Ca. parānmukhaṃ, viparyayañānam / (parānmukham とは, 転倒した認識に, という意味である) N. parānmukhaṃ bahirmukhaṃ viṣayam upasthitaḥ bhoktum udyukutaḥ / (parānmukham とは, 顔を外に向けて, 対象を, すなわち享受するために, 結びついた, という意味である)

⁵⁵bahurūpāsu Cs. bahurūpāsu, suranaratiryagādideheṣu / (bahurūpāsu とは, 神・人・動物などの身体において, という意味である)

⁵⁶P.,K.: prakṛter anayatvena B. prakṛtena mamatvena Cp. nayo jñānam, tacchūnyatvena / (nayaḥ とは, 知識であり, それを欠くことによって, という意味である)

⁵⁷ātmānam bahudhā kṛtvā Cp. bahudhā, mahadādirūpeṇa / (bahudhā とは, 「大」などの姿として, という意味である) Cs. bahudhā kṛtvā, bahuviṣayān dhyātvā / (bahudhā kṛtvā とは, 多くの対象を瞑想して, という意味である)

⁵⁸yunakti Cp. yunakti, saṃsāropabhogāya prerayati / (yunakti とは, 輪廻の享受に駆り立てる, という意味である)

⁵⁹nirāmayam Cn. nirāmayam, nirdvandvaṃ paramatmānam / (nirāmayam とは, 対立物のない最高我に, という意味である) Cp. paramānandasvarūpam / (最高の歡喜を本性とする者を, という意味である) 「病なき者に」から, プルシャープラクリティとは別に第三の原理が存在すると考えられる。

⁶⁰pañcaviṃśo Cv. supāṃ sulug (Pāṇini.7.1.39) iti vacanāt pañcaviṃśaḥ, pañcaviṃśasya / paramasaṃbodhād iti sanbandhaḥ / (「格語尾の短縮形は, 主格単数語尾 s であったり, 消失していたりする」という言葉によって, pañcaviṃśas の s という主格語尾は, pañcaviṃśasya の sya である。第二十五の 最高の認識によって, というように繋がっている)

⁶¹akṣaratvaṃ niyaccheta tyaktvā kṣaram anāmayam Cv. (reading tyaktvākṣaram anāmayam) anāmayam jananamaraṇādāmayarahitam paramākṣaram nārāyaṇam tyaktvā tatprasādāt akṣaratvam amṛtatvaṃ niyaccheta / (anāmayam, すなわち, 誕生・死などの病気を欠いている, 最高の akṣaram, すなわちナーラーヤナに, tyaktvā, すなわち, その 恩 寵 おんちよう によって, akṣaratvam, すなわち, 不死性に, niyaccheta 結びつくべし, という意味である。

⁶²P.,B.: vyaktadharmāṇam K. vyaktakarmāṇam

見て⁶³，そのようになるのである⁶⁴，ミティラーの王よ。

- (40) このように不滅と滅について，天啓聖典の教説のとおりに，知識を十全にそなえた教説を，私は汝に説いた。
- (41) さらに私は汝に，疑いなく，微細な，覚醒した，そして (tathā) 汚れなき者について語るであろう。それを伝承された通りに聞くべし。
- (42) 私はサーンキヤとヨーガを二つの教義 (śāstra) の教示に基づいて述べた。サーンキヤによって説かれた教義 (śāstra) こそがヨーガの見解 (darśana) である。
- (43) サーンキヤに従う人々の覚醒を生じる知識が，大地の主よ，そこには，弟子たちの幸福のために明確に述べられている。
- (44) その教義は偉大である⁶⁵と，よき人々は言った。この(サーンキヤの)教義には，ヨーガを行う人々にとっては，ある時は乳酪 (dadhi) があり，ある時は乳脂 (śara) がある⁶⁶。
- (45) (人は) 第二十五より上の原理を見ることはない⁶⁷，人々の王よ。サーンキヤに従う人々にとっての最高者は，そこで⁶⁸正しく述べられている。
- (46) (それらは) 原理として (tattvataḥ)，覚醒した者，覚醒せぬ者，覚醒しつつある者である⁶⁹(と述べられている)。覚醒しつつある者と覚醒した者とは，ヨーガの教義 (であ

⁶³P.,B.: prathamam dr̥ṣtvā K. paramam dr̥ṣtvā Ca. prathamam, prathamapadam prādhānyaparam / (prathamam とは，第一の位置，最も主要である，という意味である) Cn. prathamam, avyaktasya ādimam / (prathamam とは，未顕現の第一番目，という意味である) Cs. dr̥ṣtvā, ātmattvenānubhūya / (dr̥ṣtvā とは，アートマンの真理として体験して，という意味である) Cv. jīvasya tu kadādin nirguṇatvam iti sūcayitum paramam nirguṇam uktam / (個我はしかし時にはグナなき者である，と示すために，「最高者をグナなき者と」言われたのである)

⁶⁴tādṛg bhavati Cv. tādṛg bhavati, na tu tad eva bhavati / (tādṛg bhavati とは，そのもの自体ではない，ということである)

⁶⁵P. bṛhac caiva hi tat śāstram B. bṛhac caivam idam śāstram K. pṛthak caivam idam śāstram

⁶⁶P.,K.: punar dadhi punaḥ śaraḥ B. punar vede puraḥsaraḥ Ca. (reading sa[śa]rād dadhi punaḥ sa[śa]raḥ): yathā śarāt dadhi, maṇḍodañcanādinā dadhi, tataḥ śaraḥ, iti adho dhārayantī anavasthā anāditayā parikriyate / (例えば，śarāt dadhi，すなわち，泡の上昇などによって dadhi 乳酪が(生じ?)，それから śaraḥ 乳脂が(生じる)，というように，下で保持している無終性は(?)，無始性によって支えられている(?))

Cn. (reading punar vede puraḥsaraḥ): sāmkyasāstre vede ca atyantam ādaro 'sti / (サーンキヤの教義においても，ヴェーダにおいても，究極的には(人々の)尊敬がある，という意味である)

Cp. (reading yathā vede puraḥsaraḥ): puraḥsaraḥ praveśaḥ / sa vā dadhi punaḥ saraḥ iti pāṭhe, dadhi saraḥkṣepād yathā dugdhānantaram dadhi bhavati, dadhibhāvānantaram ca punaḥ saro bhavati, tathā yogānām asmin zastre saṃkṣepavistarābhyām apekṣitaprāptir ity arthaḥ / (puraḥsaraḥ とは，(ヴェーダに) 入ることである。sa vā dadhi punaḥ saraḥ という読みの場合には，乳脂 (sara) の投入によって，搾った直後に乳酪になり，乳酪の状態の直後に再び乳脂になるのと同様に，ヨーガを行う者たちには，この聖典における略説と詳説から，望まれたものへの到達がある，という意味である)

Cs. (reading asmiñ śāsteṣu yogānām na dadhīcipuraḥsarāḥ): dadhīciprabhṛtayaḥ pañcaviṃśat param saṃsāravatiriktam paramātmānaṃ paśyatīty arthaḥ / (グディーチを始めとする者たちは，第二十五よりも上位の，輪廻を離れた最高我を見る，という意味である)

⁶⁷P.,K.: na paśyati B. paśyate na

⁶⁸P. param tatra B.,K.: param tattvam tatra は，サーンキヤの教義で，か。

⁶⁹P.,K.: buddham apratibuddham ca budhyamānaṃ ca B. buddham apratibuddhatvād budhyamānaṃ ca Ca. buddhādhitraye dvayam ātmajñānaprakāśakam / (覚醒した者など三種の中で，二つがアートマンの知識を照らすものである)

る)と人々は言った。

[296 章]⁷⁰(B.308 章, C.11466-11517, K.313 章)

ヴァシシュタ仙は言った。

- (1) 覚醒せぬ者、あるいは未顕現というこのグナ (guṇa 変異物) のあり方を聞くべし⁷¹。
これ(プラクリティ)は、もろもろのグナを維持し、創造し、引っ込めるのである⁷²。
- (2) (プラクリティは)絶えずここで、遊戯のために変異し⁷³、人々の王よ、自分を多様にして⁷⁴、それらとして現れるのである⁷⁵。
- (3) このように変異しているプラクリティを、覚醒しつつある者は⁷⁶認識しない。人々は、覚醒が明らかでないために⁷⁷、覚醒しつつある者と言うのである。
- (4) しかし彼は、未顕現を、それがグナ(変異物)を伴うにしろ伴わないにしろ、認識しない⁷⁸。従って人々は、時には⁷⁹、彼を覚醒せぬ者(apratibuddhaka)と云った。
(Cf.Hopkins[Great Epic]: apratibudhyakam (sic), p.235.3)
- (5) もしも未顕現を第二十五として⁸⁰認識するならば、彼(プルシャ)は⁸¹目覚めつつある者(budhyamāna)となる。彼はその時はまだ、執着を本性としていると⁸²伝えられている。

⁷⁰この章には Edgerton の英訳がある。(Edgerton[1965]: pp.317-322。ただし vv.44-45 を除く。)

⁷¹P.,K.: aprabuddham athāvyaktam imaṃ guṇavidhiṃ śṛṇu B. atha buddham athābuddham imaṃ guṇavidhiṃ śṛṇu Cn. guṇavidhiṃ, guṇānāṃ sattvādīnām eva vidhiṃ vidhānaṃ prabhāvam / (guṇavidhiṃ とは, guṇānām, すなわち純質などの, vidhiṃ, すなわち, 規約あるいは力を, という意味である) Cp. (reading guṇavidhiṃ): guṇānāṃ sāmyarūpam / yadva guṇānāṃ sarvajñatātriptiprabhṛtīnām nidhānam / ((guṇavidhiṃ とは) もろもろのグナ(構成要素?)の等しい姿である。あるいは, guṇānām, すなわち, 一切知者性や満足などの, 貯蔵庫である) Cs. guṇavidhiṃ, guṇānāṃ ādhāram / (guṇavidhiṃ とは, もろもろのグナの基盤である) B. はこの後に P.,K. の 2cd,3ab にあたる 2 行を挿入している。そのため第 1 詩節から第 3 詩節までの順序は P.,K. とは異なっている。

⁷²P.,K.: sṛjaty ākṣipate tathā B. sṛjaty ākṣipate tadā Cp. sṛjati, sṛṣṭikāle / ākṣipate, saṃhārikāle / (創造の時には創造し、帰滅の時には引っ込める, ということである)

⁷³P. vikurvanti B.,K.: vikaroti K. は詩節の順序は P. と一致しているが、読みは B. と同じである。

⁷⁴bahudhā kṛtvā Cn. bahudhā, viśvataijasaprajñāvirāṣṭrāntaryāmirūpeṇa / (bahudhā とは, 一切・光・英知・光輝・経糸・内制者の姿として, という意味である)

⁷⁵P. tāny eva ca vicakṣate B.,K.: tāny eva pravīcakṣate

⁷⁶P. vikurvāṇāṃ budhyamāno B. vikurvāṇo budhyamāno K. vikurvāṇaṃ budhyamāno

⁷⁷avyaktabodhanāc caiva Cv. avyaktabodhanāc caiva, vyaktaṃ spaṣṭaṃ pratyakṣaṃ na bhavati avyaktaṃ anumitirūpaṃ jñānam / (avyaktabodhanāc caiva に関して。vyaktaṃ, すなわち, はっきりと, 直接的, ではないのが avyaktaṃ である。それ(avyaktaṃ)は, 推理を本質とする知識である)

⁷⁸avyaktaṃ Cn. avyaktaṃ karṭṛ, saṅgaṇaṃ rūpādīmat, nirguṇaṃ pradhānapuruṣau vā, na budhyate, acetanavād avyaktasya / ata eva tadapratibuddhakaṃ, jaḍam ity āhuḥ / (avyaktaṃ は主格であり, それは, saṅgaṇaṃ, すなわち, 色などをもつ者を, あるいは, nirguṇaṃ, すなわち, 第一原因とプルシャを, 認識しない。未顕現は意識なきものであるから。従って人々は, それを, apratibuddhakaṃ, すなわち愚か者, と云った)

⁷⁹kadācit tv eva Cs. kadācit, kalpe (kadācit とは, 劫の中で, という意味である)

⁸⁰avyaktaṃ etad vai pañcaviṃśakam Cn. avyaktaṃ karṭṛ, yadi jānāti tarhi pañcaviṃśakam cidābhāsam eva upādhiviśiṣṭamayam aham astīti jānīyān na tu ṣaḍviṃśam asaṅgam / (avyaktaṃ は主格である。もしも(未顕現が)知るならば, その時には, 知に類似し, 条件によって特殊化されている第二十五を「私である」と知るであろう。しかし, 執着のない第二十六を(知るの)ではない)

⁸¹P.,K.: eṣa B. eva

⁸²saṅgātmaka Cs. saṅgātmakaḥ, śabdādiviśayaraktaḥ, saṃsāri / (saṅgātmakaḥ とは, 音声などの対象に愛着する, 輪廻する者のことである)

- (6) このために⁸³、人々は、不動にして未顕現(のプルシャ)を覚醒せぬ者と言う。そして、未顕現であることを認識することによって⁸⁴、覚醒しつつある者とも言う⁸⁵。(Sandhi irregular: anenāpratibuddheti) (Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8. Double Sandhi, 1.8.3. -e- < /-as i-/ , p.36.16)
- (7) そしてこの者 (asau 覚醒しつつある者) は、偉大な第二十五は、汚れなく、目覚め、無量の、恒常の第二十六⁸⁶であることをも認識しない。
- (8) (覚醒しつつある者は) 常に⁸⁷第二十五と第二十四を、目に見えるものと見えぬものにつき従うものであり、両者は大きな光輝をもつ⁸⁸と認識している。(Hopkins[Great Epic]: Brahman, connected with the visible as well as the invisilble, p.136.21)
- (9) しかし(覚醒しつつある者は) かの (tad) 未顕現の唯一のブラフマンを⁸⁹認識しないのである、親愛なる者よ。ただ第二十五と第二十四を見るのである⁹⁰。
- (10) 覚醒しつつある者が、「私は(プラクリティとは)別である」と自分を考える時、彼は、プラクリティを支配し⁹¹、未顕現を見る者となる。
- (11) 最高の清浄で汚れなき認識を⁹²知る時、その時(彼は)第二十六として、虎のごとき王よ、覚者たることに至るであろう。
- (12) それから彼は、創造と帰滅を性質とする未顕現を捨てる。グナ(物質的構成要素)をもたない彼は、プラクリティをグナをそなえ、意識なきものと知るのである。

⁸³anena Cn. anena, saṅgātmakena hetunā / avikāriṇam api santam etaṃ puruṣaṃ apratibuddhaḥ mūḍha iti vadanti / sandhir āraṣaḥ / (anena とは、「執着を本性とする」という理由によって、人々は、変異することなく存在しているこのプルシャを、apratibuddhaḥ、すなわち愚かな者、と言うのである。sandhi は古形。)

⁸⁴P. avyaktabodhanāc caiva B.,K.: avyaktabodhanāc cāpi

⁸⁵budhyamānaṃ vadanti Cn. budhyamānaṃ jīvaṃ pañcaviṃśaṃ cidābhāṣaṃ vadanti / cidābhāṣo 'pi dr̥ṣyatvān nānyaṃ draṣṭum iṣṭe / (budhyamānaṃ とは、個我である。第二十五は知の顕現であると vadanti、すなわち、人々は言う。知の顕現であっても、見の対象性の故に、他のものを見ることはできない)

⁸⁶ṣaḍviṃśaṃ Cn. ṣaḍviṃśaṃ, nirupādhicaitanyam / sarvaparakāśakam ity arthaḥ / (ṣaḍviṃśaṃ とは、限定のない知であり、一切を照らす者である、という意味である)

⁸⁷P.,B.: satataṃ K. sa tu taṃ

⁸⁸P. dr̥ṣyādṛṣye hy anugataṃ ubhāv eva mahādyuti B. dr̥ṣyādṛṣye hy anugataṃ svabhāvena mahādyute K. dr̥ṣyādṛṣyau hy anugatāv ubhāv eva mahādyuti Cn. ṣaḍviṃśasya sattve mānaṃ āha — dr̥ṣyeti / kārye kāraṇe ca svabhāvena svasattayānugataṃ sanmātraṃ kevalaṃ vastu ṣaḍviṃśaśabditaṃ ity arthaḥ / (第二十六の存在についての推理を「見えるもの」と述べている。結果において、そして原因において、svabhāva 本性によって、自身の存在性が anugataṃ 推理される、存在のみの唯一の実体が、第二十六という語で言われている、という意味である)

⁸⁹P. avyaktaṃ na tu tad brahma B. avyaktam atra tad brahma K. avyaktaṃ tat tu tad brahma avyaktam は、ブラフマンの形容詞ではなく budhyamāna をさすか。

⁹⁰ P.,B.: na paśyati K. ca paśyati Edgerton は、K. の読みのように、na を ca ととっている (Edgerton[1965]: p.318,fn.1)。na では意味がとれない。

⁹¹tadā prakṛtimān Cn. prakṛtimān, prakṛtijayī / (prakṛtimān とは、プラクリティを征服する者、という意味である) Edgerton は aprakṛtimān として、「free from material nature」と解している。(Edgerton[1965]: p.318,fn.2) prakṛtimān で「プラクリティを制している」と解せないか。

⁹²P. buddhiṃ viśuddhām amalām B.,K.: buddhiṃ vimalām amalām

- (13) それから彼は未顕現を認識することによって唯一性をそなえた⁹³者となる。唯一性に達して⁹⁴、解脱し、本性に⁹⁵到達するであろう。
- (14) (解脱した)存在とは、そのように⁹⁶原理を離れ⁹⁷、不老不死のものである、と人々は言った。(未顕現に属する他の)原理に依存するために⁹⁸、それは原理をもつが、(それ自体は原理ではない)のである、栄誉を与える者よ⁹⁹。賢者たちは¹⁰⁰(このように)二十五の原理を語る。
- (15) これは原理をもつものではない。親愛なる者よ、これは原理を離れ、悟りをもつものである。なぜならば、これはすばやく¹⁰¹原理を開放するからである¹⁰²。それこそが覚醒した者の特徴である (buddhasya lakṣaṇam)。
- (16) 「私は第二十六である」という英知をもち、不老不死の者は、唯一の力によって¹⁰³捉えられつつ、(最高者との)同一性に至る。(このことに)疑いはない。
- (17) 覚醒した第二十六によって覚醒しつつあるとしても、(第二十五は)意識あるものではない。このように¹⁰⁴(覚醒と意識の)別異性 (nānātva) がサーンキヤの伝統的教説 (sāṃkhyaśrutinidarśana) によって言われている¹⁰⁵。
- (18) 知 (cetana) に満たされた¹⁰⁶第二十五は、それが意識によって意識されない時¹⁰⁷、(第二十六と)同一となる。

⁹³kevaladharmā Cs. kevaladharmā, kevalasya brahmaṇo dharmo 'saṃsārisvādirūpo yasya saḥ / (kevaladharmā とは、kevalasya、すなわち、ブラフマンの、dharmaḥ、すなわち、非輪廻者性などの性質が、その者にある、という意味である)

⁹⁴kevalena samāgmya Cp. kevalena, saṅgīṣṭena / (kevalena とは、第二十六として、という意味である)

⁹⁵ātmānam Cp. ātmānam, svarūpam / (ātmānam とは、本性に、という意味である)

⁹⁶P. etat tat tattvam ity B. etat tu tattvam ity K. etam vai tattvam ity

⁹⁷nistattvam Cn. nistattvaḥ, kāryakāraṇavarjitaḥ / (nistattvaḥとは、結果と原因を離れている、という意味である)

⁹⁸tattvasaṃśrayaṇād Cs. tattvasaṃśrayaṇāt, avidyākāryaśarīre jīvbhāvena praveśāt / (tattvasaṃśrayaṇāt とは、無知の結果である身体に、個我の状態で入ったために、という意味である)

⁹⁹P.,B.: etat tattvavan na ca mānada K. eṣa tattvavān na ca mānada Edgerton[1965]: it is both possessing the principles and not so.(p.318, v.14)

¹⁰⁰mañiṣiṇaḥ Cp. ata eva tattvapadaṃ pañcaviṃśāv eva kapilādayaḥ prayuñjate / (従って、tattva という語を、二十五においてのみ、カピラ仙などは、用いている)

¹⁰¹kṣīpraṃ Cs. (gloss): vidyotpattisamakālam / (kṣīpraṃ とは、知識の発生と同時に、という意味である)

¹⁰²eṣa muñcati tattvaṃ hi Cn. tattvaṃ, ahaṃ brahmāsmīti vṛttam api eṣa muñcati / (tattvaṃ、すなわち、私はブラフマンであるという振舞い、もまた、eṣa muñcati これは開放する、という意味である)

¹⁰³kevalena balenaiva Cn. balena, svasāmarthyena / yathā katakarajo rojontaraṃ śamayāt svayam api śāmyati, tathā caramā brahmākārā vṛttiḥ vṛtтыantaraṃ svātmānam ca śamayatīty arthaḥ / (balena とは、自らの力によって、という意味である。カタカ樹の埃は (? katakarajo)、他の埃を静め、自身もまた静まる。それと同様に、ブラフマンの姿をした最後の状態 (vṛtti) は、他の状態を、すなわち自分のアートマンを、静める、という意味である。) Cp. balena, jñānabalena / (balena とは、知識の力によって、という意味である)

¹⁰⁴etan(d) Cp. etat, saḍviṃśād bhedenātmano jñānam / (etat とは、第二十六から異なるものとして、アートマンの知識を、という意味である)

¹⁰⁵この詩節が問題としているのは、悟りを得た者の、悟り以後の意識の状態についてのようである。語根 budh の派生語の多義性から、言葉遊び的な要素も指摘されている。(Edgerton[1965]: p.319,fn.1)

¹⁰⁶cetanena sametasya Cs. sametasya, caitanyābhāsayuktāntaḥkaraṇasaṃśṛṣṭasya / (sametasya とは、知の光と結びついた内的器官によって創造された、という意味である)

¹⁰⁷yadā buddhyā na budhyate Cn. buddyā na budhyate, dhīnirodhe sati gāḍhasuṣuptivat saḍviṃśānubhava ity arthaḥ / (buddyā na budhyate とは、深い眠りのごとく、意識が滅した時、第二十六の経験がある、という意味である)

- (19) 覚醒しつつある者は、覚醒せぬ者と同一となるのである、ミティラーの王よ。この執着を性質とする者が、人々の王よ、無執着を本性とする者となるのである。
- (20) 執着のない自分に達して、人々は (?) 不生の第二十六を知った¹⁰⁸。そしてこのように、第二十六の悟りに基づいて (? *śadvimśasya prabodhanāt*)、第二十四を立つべき場所ではない (?)¹⁰⁹と認識する時、力ある者(第二十五)は、未顕現を捨てるのである¹¹⁰。
- (21) このように、覚醒せぬ者¹¹¹、覚醒しつつある者、そして覚醒した者が、正しく伝承の教示どおりに (*yathāśrutinidarśanāt*) 汝に述べられた、罪なき者よ。別異性と単一性も¹¹²以上のようにもろもろの聖典の見解に従って¹¹³知られるべし。
- (22) ブヨとイチジクの木における相違のように、この両者は異なる。水中の魚のごとく、その相違性は認識されるべし。(Cf. MBh. XII. 187. 38, 39, 240. 21; Māthara ad SK 16, Hopkins [Great Epic]: like a fish in water, p. 133. 26)
- (23) この両者の相違性と単一性 (*nānātvaikatvam*) は、このように理解されるべし。それが (*etad*) 解脱であると述べられた。それは、未顕現の知識に関連している¹¹⁴。
- (24) この二十五からなる者の、もろもろの身体に¹¹⁵存在する者が、未顕現の領域から¹¹⁶解き放たれるべし、人々は言った。(Sandhi irregular: *mokṣayitavyeti prāhur* (Cf. Oberlies [Grammar]: 1.8. Double Sandhi, 1.8.3. -e- < /-as i-/, p. 36. 17))
- (25) 彼はこのようにして解脱するであろう、他の仕方ではない¹¹⁷、ということは確かである。彼は最高者と¹¹⁸合一して、最高者の性質をもつ者となる。

¹⁰⁸P. *viduḥ* B., K.: *vibhum*

¹⁰⁹P. *agādhaṃ* B. *asāraṃ* K. *mahābhāga*

¹¹⁰*vibhus tyajati cāvyaṅgam* Cv. *vibhuḥ samarthaḥ san, avyaṅgam avyaṅgamūlam brahmāham ity ahaṅkāraṃ, tyajati / (vibhuḥ, すなわち能力をもちつつ, avyaṅgam, すなわち未顕現の根本であるブラフマンを, すなわち「私は存在する」という自我意識(自己宣言?)を, 捨てる, という意味である)*

¹¹¹*apratibuddhaś ca* Cv. *apratibuddhaḥ mandamatibhiḥ, subuddhibhiś ca pratibuddho nārāyaḥ / (apratibuddhaḥ とは, もろもろの愚かな考えによって, という意味である。もろもろのよき知識によって覚醒した者は, ナーラーヤナ神である)*

¹¹²*nānātvaikatvam* Cs. *nānātvaṃ ca ekatvaṃ ca nānātvaikatvam / (nānātvaikatvam とは, 別異性と単一性とである) Cv. nānātvaṃ ca ekatvaṃ ceti dvandvasamāse kṛte tasyāpi punar ekībhāvi nānātvaikatvam iti śabdaniṣpattir iti jñeyam / (「別異性と単一性」という並列複合語が作られた時, 並列複合語であっても *nānātvaikatvam* という単数形としてこの語が作られた, と知るべし)*

¹¹³P., K.: *śāstradrṣṭibhiḥ* B. *śāstradarśnāt*

¹¹⁴P. *etad vimokṣa ity uktam avyaktajñānaśaṃhitam* B. *etad hi vimokṣa ity uktam avyaktajñānaśaṃhitam* K. *etad hi mokṣa ity uktam avyaktajñānaśaṃjñitam* Cs. (*reading jñānam ajñānaśaṃhitam*) *jñānam, svaprakāśa-brahmasvarūpam / nānātvaṃ ajñānam / tena śaṃhitam śaṃsprṣṭam, śaṃsārāvasthāyām / (jñānam とは, 自らを照らすブラフマンの本性である。ajñānam とは, 別異性である。それによって śaṃhitam, すなわち, 結びついて, ということである。(それが起こるのは) 輪廻の状態においてである)*

¹¹⁵*deheṣu* Cp. *deheṣv iti bahuvacanād eka eva sarvadehavartī / (deheṣu と, 複数形が用いられていることから, あらゆる身体に存在する者は同一である, ことになる) この解釈によれば *puruṣa* は単一で *vibhu* ということになる。*

¹¹⁶*avyaktaḥ carāt* Cs. *avyaktaḥ carāt, ajñānakāryaśaṃsarāt / (avyaktaḥ carāt とは, 無知の結果である輪廻から, という意味である)*

¹¹⁷*nānyatheti* Cp. *nānyathā, karmādibhiḥ / (nānyathā とは, 行為などによって, という意味である)*

¹¹⁸P., K.: *pareṇa* B. *paraś ca* Cv. *pareṇa śaṃsārībhyo bhinnena nārāyaṇena / (pareṇa とは, 輪廻する者たちとは異なるナーラーヤナ神と, という意味である)*

- (26) 彼は、清浄な人と合一して清浄な人の性質を備え、覚者と合一して覚醒し、解脱した人と合一して、解脱者の性質を備えるであろう、雄牛のごとき人よ。
- (27) (彼は) 分離を特性とする者と¹¹⁹合一して、分離を本性とする者¹²⁰となろう。解脱した者と合一して、この世で解脱者となるであろう。
- (28) (彼は、) 清浄な行為を行う、清浄にして無量の光をもつ者となる。汚れなき本性をもつ者と合一して、汚れなき本性をもつ者 (vimalātmā) となる。
- (29) (彼は) 唯一者と¹²¹合一して、唯一性を本性とする者となる。独立者 (svatantraḥ) と合一して独立し、独立性を得る。
- (30) これまでに、私は汝に、偉大な王よ、正しくありのままに、無私性を目的として捉え¹²²、真実 (tathya) を語った。それは永遠にして清浄な大古のブラフマンである。(韻律: Upajāti)
- (31) ヴェーダを基盤とする人に対して¹²³、王よ、汝はこの覚醒を引き起こす最高の教えを与えるべきではない¹²⁴。知識を求め、覚醒を求める謙虚な人に対して与えるべきである。(韻律: Vaṃśa-sthavira, a,d 句不規則¹²⁵)
- (32) そして、生来虚偽を好む者、ならず者、官宦、邪悪な知識ある者、学者的知識によって他を苦しめる者に対して与えられるべきではない。この教えを汝は¹²⁶いかなる者に与えるべきかについて聞くべし。(韻律: Vaṃśa-sthavira, b,d 句不規則¹²⁷)
- (33) 信仰篤き者、徳を備えた者、全く他者の非難をしない者、清浄さをそなえた者 (viśud-dhayogāya)、知恵ある者、活動的な者¹²⁸、忍耐ある者 (kṣamiṇe)、慈悲ある者 (hitāya)

¹¹⁹P. niyogadharmiṇā B.,K.: viyogadharmiṇā Cs. viyogadharmiṇā, agnihotrādaḥ karmani / (viyogadharmiṇā とは、アグニホートラ祭などの祭式において、(分離を特性とする者と) という意味である) Edgerton も viyogadharmiṇā の読みを採用している (Edgerton[1965]: p.320,fn.1)。

¹²⁰P. niyogātmā B. vimuktātmā K. viyogātmā

¹²¹kevalena Cs. kevalena, jīvanmuktenācāryeṇa / (kevalena とは、生前解脱をした師匠によって、という意味である)

¹²²P.,K.: amatsaratvaṃ pratigṛhya cārthaṃ B. amatsaratvaṃ parigṛhya cārthaṃ Cs. amatsaratvaṃ pratigṛhya, śamadamādisādhanaṃ svīkṛtya / (amatsaratvaṃ pratigṛhya とは、寂静・制御などの達成手段を選んで、という意味である) Deussen: wer die Selbstlosigkeit als Ziel sich setzt Edgerton[1965]: taking disinterestedness as (my) aim (p.320,v.30)

¹²³P.,B.: na vedaniṣṭhasya janasya K. nāvedaniṣṭhasya janasya Cn. vedaniṣṭhasya nidāghavat karmaśraddhājaḍasya nāvedaniṣṭhasyeti pāṭhaḥ svacchaḥ / (vedaniṣṭhasya とは、熱のように (?), 祭式を望む愚かな人には、という意味である。「ヴェーダを基盤としない人に対しては」という読みでは、意味は明瞭である) Cs. vedaniṣṭhasya, karmabhāgārthaparasya svargādikāmināḥ / (vedaniṣṭhasya とは、祭式の分け前をもつばら目的とし、天界などを望む人に、という意味である) Deussen は、nāvedaniṣṭhasya と読むことを提案している。(p.636, v.32)

¹²⁴Veda に否定的なこの内容に関し、Nīlakaṇṭha は、「ヴェーダを基盤としない人に対しては」という読みを提示し、Duessen も同様の提案をしている(前項の脚注)。Edgerton[1965] は、ヴェーダに否定的な BhG.2.42-46 の参照を指示している (p.320,fn.2)。

¹²⁵a 句は、11 音節で Upajāti, d 句は、最終音節が短音節になっている。

¹²⁶P.,K.: tvayedam B. tu deyam

¹²⁷b 句: — — | — — | — — | — — || d 句: — — | — — | — — | — — ||

¹²⁸kriyāvate Cs. kriyāvate, īśvarāraṇabuddhyā svakarmaniratāya / (kriyāvate とは、自在者に与えられた認識によって、自分の行為に喜ぶ者に対して、という意味である)

に対して, (韻律: Upajāti)

- (34) 孤独を好む者, 規則を好む者 (vidhipriyāya), 論争しない者, 多聞の者, 学識ある者, 悪に寛大でない者 (na cāhitakṣame), もろもろの靈魂を (dehinām) 制御し寂靜に保つことのできる者に (与えるべし)¹²⁹。(韻律: Triṣṭubh (ab 句 Upajāti, cd 句 12 音節¹³⁰))
- (35) これらの徳性に全く欠けている者に, 最高にして清浄なブラフマン (の教え) は与えられるべきではない, と人々は言った。このような者に対して与えられたならば, それは, 器でない者に (教えを) 与えたために, 教えを説く者 (dharmapravakṭr) を幸福にすることはないであろう。(韻律: Upajāti, c 句不規則¹³¹)
- (36) 誓約なき者に対して (avratāya), 宝に満ちたこの大地を与えることがあるとしても, この教えは与えるべきではない¹³²。感官を制御した者に (与えるべし)。かくして疑いなくこれは汝の最高の贈物となるであろう, 人の中のインドラよ。(韻律: Upajāti¹³³)
- (37) カラーラ王よ, 汝にはいかなる恐れもあるべからず。今日汝は最高のブラフマンが正しく語られるのを聞いた。(ブラフマンは) 最高の浄化具であり, 憂いなく¹³⁴, 終りなく, 始まりも中間もなく, (韻律: Upajāti)
- (38) 誕生は知りたく¹³⁵, 不死にして, 病なく, 恐れを離れ, 吉祥である。今日 (それを見, (解脱の) 知識の真実と意味をすべて¹³⁶知ったのであるから (viditvā), 王よ, 迷妄を捨てよ。(韻律: Upajāti)
- (39) この教えは, かつて¹³⁷(これを) 語る永遠のヒラニヤガルバから獲得された。(私は) 熱心に (彼に) 頼んで (prasādyā), 恐ろしい熱力をもつかの永遠のブラフマンを獲得したのである。あたかも今日汝が獲得したかのように。(韻律: Vaṃśa-sthavira) (Cf. Hopkins [Great Epic]: Hiraṇyagarbha–Vasiṣṭha–Nārada, p.133.33; Edgerton [1965]: Hiraṇyagarbha, p.321, fn.1))
- (40) 人の中のインドラよ, 汝が私に尋ねたのに従い, 私は今日汝に語った。解脱を知る者たちの大古の¹³⁸偉大な知識を, ブラフマンから私が得た通りに, 人の中のインドラ

¹²⁹P. vijānate caiva na cāhitakṣame dame ca śaktāya śame ca dehinām B. vijānate caiva na cāhitakṣame dame ca śaktāya śame deyam K. vijānate caiva damakṣamāvate śaktāya caikātmaśamāya dehinām

¹³⁰cd 句は, それぞれ Upajāti に長音節を加え, 12 音節の韻律 Vaṃśasthavira になっている。

¹³¹c 句は, Upajāti に長音節を加え, 12 音節の韻律 Indravamśā になっている。

¹³²P. nadeyaṃ B., K.: na deyaṃ Cf. Oberlies [Grammar]: p.359.8, na-compounds

¹³³abcd の各句は, すべて長短の音節の組み合わせは異なるが, それぞれ Upajāti の韻律に収まっている。

¹³⁴P. niḥśokam B., K.: viśokam

¹³⁵agādhajanma Cn. agādhajanma, agādham apratiṣṭhitam janma yena, janmanivartakam / (agādhajanma とは, その者によって janma 誕生は, agādham, すなわち, 確立していない, ということであり, 誕生を離れている, という意味である) Cp. nedam gādham atigambhīram, ajanma, maraṇanivartakam / (nedam gādham (これは底ではない) とは, あまりに深い, ajanma とは, 死を離れている, という意味である)

¹³⁶P. sarvaṃ jñānasya tattvartam idaṃ B., K.: sarvajñāsyā tattvārtham idaṃ

¹³⁷P. purā B., K.: mayā

¹³⁸P. purāṇam B., K.: parāyaṇam

よ。(韻律: Upajāti (c 句不規則¹³⁹))

ビーシュマは言った。

- (41) このように、最高の聖仙(たち)の教説に基づいて、そこから第二十五は帰還しない最高のブラフマンが述べられた。偉大な王よ。
- (42) 最高の知識に達しても、再生を得る。覚醒しつつある者は、(本来)不老不死であるが¹⁴⁰、(そのことを)正しく認識しないからである。
- (43) このように、親愛なる者よ、もろもろの知識の中でこの上なき幸福をもたらす最高の知識を、私は、神仙(ナーラダ)から聞いて、汝に¹⁴¹正しく語ったのである、王よ。
- (44) この知識は、ヒラニヤガルバから偉大なヴァシシュタ仙が獲得し、虎のごとき聖仙ヴァシシュタから、ナーラダ仙が得たのである。
- (45) 私は、ナーラダ仙からこのように永遠のブラフマンを知った。汝は、この最高の境地を聞いたからには、クル族のインドラよ、悲しんではならぬ。
- (46) 滅と不滅を知る者には恐れはない。しかしそれを知らない者には、王よ、恐れがある。
- (47) 無知のために迷妄を本性とする者は、何度も(この世界で)苦しみつ¹⁴²、死後には、死に終る何千という誕生を得るのである。
- (48) (人は)神の世界を、そして動物の状態や人間の状態もまた、獲得する¹⁴³。時の経過の中で (kālena) その無知の海から清められることがあるとしても (yadi śudhyati)。
- (49) 無知の海は、恐ろしく、姿なく (avyaktaḥ)、深いと言われる。毎日毎日、生き物たちはそこに沈むのである、パーラタ族よ。
- (50) 汝は、深く姿なき永遠の(海)から上陸した故に、汝には汚れもなく、暗闇もないのである、王よ。

[297 章] (B.309 章, C.11518-11542, K.314 章)

ビーシュマは言った。

¹³⁹c 句: 〰—〰|—〰〰|—〰〰|—〰〰||

¹⁴⁰P. 'jarāmarāḥ B.,K.: 'jarāmaram Edgerton は、'jarāmaram の読みをとっている (Edgerton[1965]: p.321,fn.2)。'jarāmarāḥでは avabudhyati の目的語がはっきりしない。恐らく「不老不死であることを」であると思われるので、「そのことを」と補った。

¹⁴¹P. niḥśreyasakaram jñānānam te param mayā B.,K.: niḥśreyasakaram jñānam te paramam mayā

¹⁴²P. upadravan B.,K.: upādravat Cn. upādravat kleśavān abhūt / (upādravat とは、煩惱をもつ者となった、という意味である)

¹⁴³K. はこの後に次の 1 行を挿入している。

uttirṇo 'smād agādhāt sa param āpnoti śobhanam /
(その深い海から上陸したならば、その者は、最高善を得るであろう)

- (1) ジャナカ王のある王子は、人里離れた森で鹿を追っている時、ブリグの家系を継承するすぐれたパラモンの聖仙を見た。
- (2) その座っている尊者に近づき¹⁴⁴、お辞儀をして、彼に許された後、富ある王子は次のことを尋ねた。
- (3) 「尊者よ、限りある体において、欲望 (kāma) に支配された人間にとって、死後あるいはまたこの世で¹⁴⁵、この幸福 (śreyas) とは一体何でありましょうか。」
- (4) 熱力に富む偉大な聖仙は、尊敬され、問われたので、彼のために幸福をもたらす次の言葉を詠んだ¹⁴⁶。
- (5) 汝は、死後もこの世でも、心にとって喜ばしきことどもを願っている¹⁴⁷。(それ故) 感官を制御して、もろもろの生き物にとって喜ばしからぬことどもをやめよ¹⁴⁸。
- (6) よき人々にとって、ダルマ (dharma 法・規範) が幸福である。よき人々にとって、ダルマが抛り所である。親愛なる者よ、動くもの動かぬものを伴う三種の世界はダルマから生じたのである。
- (7) 甘味を好む者よ、もろもろの欲望に対する無関心 (vaitṛṣṇyam) へとなぜ赴かないのか。知に欠ける者よ、汝は (崖の) 蜜を見、崖を見ないのである。(Cf. Apte, Appendix E, A collection of Popular Sanskrit Maxims, p.69)
- (8) 知識の果報を望む者は、知識における蓄積がなされなければならない。それと同様に、ダルマの果報を望む者は、ダルマにおける蓄積がなされなければならない。
- (9) 悪しき者が、ダルマを望んで、清浄な行為を行うのは難しい。しかしよき人は、ダルマを望み、為し難き行為をたやすく行うのである。
- (10) 森の中で、村人の楽しみに従って振舞う者は、村人に等しい。村の中で、森の楽しみに従って振舞う者は、森に行く者に等しい。
- (11) 無活動においても、あるいは活動においても、もろもろのよき点と悪しき点とを (guṇāguṇān) 考慮に入れ、心を集中して、心・言葉・(身体的) 行為からなるダルマを¹⁴⁹敬うべし。

¹⁴⁴P.,K.: tam āsīnam upāsīnaḥ B. upāsīnam upāsīnaḥ

¹⁴⁵P. pretya vāpīha vā B.,K.: pretya cāpīha vā

¹⁴⁶B.,K. は、この詩節の後に ṛṣir uvāca を挿入している。

¹⁴⁷P.,B.: vāñchasi K. nacecchasi

¹⁴⁸bhūtānām pratikūlebhyo nivartasva Cs. (gacchasi instead of vāñchaasi) bhūtānām pratikūlāni vāñchan svayam api manasaḥ pratikūlāni gacchasi / (bhūtānām pratikūlebhyo nirvartasva とは、生き物たちにとってもろもろの喜ばしからぬことどもを願うならば、自らも心にとって喜ばしからぬことどもに、gacchasi、すなわち、赴く、という意味である)

¹⁴⁹P. manovākkarmake dharme B. manovākkāyike dharme K. manovākkarmage dharme

- (12) 常に多くが聖者たちに対して、不平を言わずに与えられるべし。約言と清めに基づいて要求され¹⁵⁰、時と場所にならなくて正しく行われたならば。
- (13) ふさわしい方法によって (śubhena vidhinā) 獲得したものを、ふさわしき人 (arha) に与えるべし。怒りを捨て、布施した後は¹⁵¹、(布施したことを) 後悔してはならず、称えてもならない。
- (14) 悪意なく、清浄にして自己を制御し、真実を語り、正直であり、母胎 (yoni 出自) と行為において清浄ならば、ヴェーダを知る再生族は、(布施の) 器となるであろう。
- (15) (器となるパラモンの) 誕生には、行いよく¹⁵²、一人の男を夫とする女性 (ekapatnī) が母胎であることが望まれる。(ヴェーダの) 讃歌・祭文・韻律に通じ、六種の行為を行う¹⁵³ 知者は器と言われる。
- (16) 器に対する行為の相違によって¹⁵⁴、そして時と場所を考慮して、人ごとに、(布施という行為は同じでも) それはダルマであり、それはアダルマである、となるであろう。
- (17) 人は、小さな埃は戯れによってのように (簡単に)、大きな (埃は) 多くの努力によって、体から拭いさることができる¹⁵⁵。罪の除去も同様である¹⁵⁶。
- (18) 適切に (胃を) 空にした者にとって、牛酪 (ghṛta) は薬となる¹⁵⁷。それと同様に、欠点を除去した人には、ダルマは死後に¹⁵⁸ 安楽をもたらすのである。
- (19) あらゆる生き物において、心は (mānasam) 善と悪とはたらく。もろもろの悪を捨てて、もろもろの善にのみ到達すべし。
- (20) あらゆるところで、あらゆる人によって、あらゆる (ダルマが) 為されるのを敬うべし。汝が自分のダルマに喜ぶ (rāga) ところでは、心からダルマは行われるべきである¹⁵⁹。
- (21) 堅固でない者よ、堅忍^{けんじん}すべし。愚か者よ、賢明であれ。静まらぬ者よ、寂靜たるべし。英知なき者よ、汝は英知をもって振舞うべし。

¹⁵⁰P.,B.: prārthitaṃ vrataśaucabhyāṃ K. prārthitaṃ brāhmaṇebhyaś ca

¹⁵¹P. dattvā ca B. dadyāc ca K. dattvā 'tha

¹⁵²P., B.: satkṛtā K. saṃskṛtā

¹⁵³ṣaṭkarmā Ganguli: six duties (of sacrificing on his own account, officiating at the sacrifices of others, learning, teaching, making gifts, and receiving gifts) (p.33.24-26) Deussen も同じ項目を挙げている。(p.640, v.15)

¹⁵⁴P.,B.: pātrākarmaviśeṣeṇa K. pātrākarmaviśeṣeṇa

¹⁵⁵P. gātrāt pramṛjyād rajasah B.,K.: gātrāt pramṛjyāt tu rajah

¹⁵⁶P. bahuyatnena mahatā pāpanirharaṇaṃ tathā B.,K.: bahuyatnena ca mahatpāpanirharaṇaṃ tathā

¹⁵⁷viriktasya yathā samyag ghṛtaṃ bhavati bheṣajam Cn. virecanāntaram eva ghṛtapānaṃ bheṣajam / (下痢の直後に牛酪を飲むのは薬である)

¹⁵⁸P. pretyadharmah B.,K.: pretya dharmah

¹⁵⁹P.,K.: kāmaṃ dharmo vidhiyatām B. kāmaṃ dharme vidhiyatām Deussen: und auch wo die Leidenschaft dich fortreisst möge wider Willen (akāmaṃ) pflichtmässig gehandert werden. (p.641, v.23) 中村 [2000]: 貪欲や愛欲があなたを [襲う] とも、法を遵守すべきである。(p.758, v.20)

- (22) (ダルマの) 手段と結びついた活力 (tejas) によって、この世でも死後でも、(人は) 幸福を得ることができる。最高の堅忍が幸福の根本である。
- (23) 堅忍なき故に、王仙マハービシャは天界より落ちた¹⁶⁰。ヤヤーティ王は、功德は尽きたが¹⁶¹、堅忍によってもろもろの世界を得た¹⁶²。
- (24) 熱力をもつ者たち、ダルマを行う者たち、そして賢者たちに仕えることによって (upasevanāt)、汝は広大な英知 (buddhi) を得るであろう。そして幸福に行きつくであろう。
- (25) 完成した自性をもつ彼は、その尊者の話を聞いて、心を欲望から引き戻して、意識 (buddhi) をダルマに向けたということである。

[298 章]¹⁶³(B.310 章, C.11543-11568, K.315 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) ダルマとアダルマから離れ、あらゆる拠り所を離れ¹⁶⁴、誕生と死を離れ、善悪を離れた者、
- (2) 吉祥にして、常に恐れなく、恒常にして、不滅であり、動揺なく、清浄で常に疲労なき者¹⁶⁵、その者について話されよ。

ビーシュマは言った。

- (3) ここで私は汝にこの古譚を語るであろう¹⁶⁶。ヤージュナヴァルキヤ仙とジャナカ王との対話を、バーラタ族よ。
- (4) デーヴァラータの末裔であり¹⁶⁷、名声高く、問を知る者たちの中で卓越したジャナカ王は、最高の聖仙ヤージュナヴァルキヤに問を発した。
- (5) 「梵仙よ、感官はいくつあるのか、プラクリティ (prakṛtayaḥ 原因物質) はいくつあると伝えられているのか。未顕現の最高のブラフマンとは何か。それよりも上位にあるのは何か。

¹⁶⁰Deussen は、マハービシャのエピソードに関し、MBh.I.96(=MBh(P).I.91) の参照を指示している。(p.641,v.15)

¹⁶¹P. kṣīṇapūṇyaś ca B.,K.: kṣīṇapūṇyo 'pi /

¹⁶²Deussen は、ヤヤーティ王のエピソードに関し、MBh.V.122(B.123)(=MBh(P).V.121) の参照を指示している。(p.641,v.15)

¹⁶³この章には Edgerton の部分訳 (vv.10-25) がある。(Edgerton[1965]: pp.323-324)

¹⁶⁴P. sarvasaṃśrayāt B.,K.: sarvasaṃśayāt

¹⁶⁵anāyāsaṃ Ca. anāyāsaṃ, nirdvandvam / (anāyāsaṃ とは、対立物をもたない、という意味である) Cn. upādhisaṃparke 'py apracyutakauṭasthyabhāvam / ((āyāsa 疲労の?) 条件と接触しても、動じない不変の状態である)

¹⁶⁶P. vartayiṣye 'ham itihāsaṃ B.,K.: vartayiṣyāmi itihāsaṃ (Sandhi irregular)

¹⁶⁷daivarātīr Ca. daivarātīḥ, devarātajanakaputraḥ / (daivarātīḥ とは、デーヴァラータ家系のジャナカ王の息子である)

- (6) 創造と帰滅,そして時 (kāla) の数について,あなたの援助 (anugraha) を求める者に対して話されよ,バラモンの中のインドラよ。
- (7) 無知のゆえに私は尋ねる。なぜならば,あなたは知識からなる蔵であるから。私は,以上のすべてを,疑問なく聞きたい。」

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (8) 大地の守護者よ,このように汝が尋ねることを聞くべし。ヨーガ行者たちの最高の知識,そして特にサーンキヤに従う者たちの(知識)を。(Cf.Hopkins[Great Epic]: sixteen modifications, eleven organs and five elements seen in XII.311.8ff(=Mbh(P)).298.8ff, p.170.3)
- (9) 汝に知られていないものは何もないが,しかし汝は私から知ろうとしている。問われたならば話さねばならない。これは永遠のダルマ (dharma 規範) である。
- (10) 八種のプラクリティ (prakṛtyaḥ 原因),そして十六種の変異物が言われている。一方,顕現したもののたちは七種であると¹⁶⁸,内我を考察する人々は (adhyātmacintaka) 言った。(Cf.Hopkins[Great Epic]: a list of Sāṃkhya tattvas, p.129.9, the Eight Sources, p.170.9; Long[1980]: pradhāna–prakṛti, p.56,fn.41)
- (11) 未顕現,大¹⁶⁹,そして自我意識,地,風,虚空,水,そして五番目として火 (cf.Hopkins[Great Epic]: fine elements, p.173.16)
- (12) これらが八種のプラクリティである。変異物についても私の言うことを聞くべし。耳,皮膚,目,舌,そして五番目として鼻,
- (13) 声と接触,色,味,そして香,発声器官,手,足,肛門,そして性器,
- (14) これら (13 詩節 ab 句に列挙された声から香) は五種の大元素における個別的特性 (viśeṣa) である,王の中のインドラよ。一方,これら (12 詩節 cd 句に列挙された耳から鼻) は知覚器官であり,個別的特性を伴うものである¹⁷⁰,ミティラーの王よ。
- (15) 思考器官は第十六番目であると,内我の道を考える人々は言った (prāhur adhyātmagaticintakāḥ)。汝,そして原理の認識に通じた他の賢者たちも (同様に考えている)。
- (16) 未顕現から大きなアートマン (mahān ātmā) が生じるのである,王よ。これを第一原因からの (prādhānikam) 「第一の創造」と賢者たちは言った。

¹⁶⁸P. atha sapta tu vyaktāni B. tatra tu prakṛtīr aṣṭhau K. āsām tu saptavyaktāni これらの相違は, ab 句の prakṛti-vikāra の分類と, c 句の vyakta との関連があいまいなために生じた,と考えられる。

¹⁶⁹P.,K.: mahāṃś caiva B. mahāntaṃ ca

¹⁷⁰saviśeṣāni Edgerton[1965]: together with the innate characteristics (of the gross elements which are their object) (p.323,v.14) (Cf.MBh.XII.294.29, 299.11, BhG.2.64,68; Hopkins[Great Epic]: the stanza interrupting the description, p.129,19,fn.1)

- (17) 大きな(アートマン)から自我意識が生じるのである,人々の王よ。これが「第二の創造」と言われ,統覚を本質とする (buddhyātmakam) と伝えられている。
- (18) 自我意識から,(五)元素の性質を本質とする思考器官が生じる。これが自我意識に由来する「第三の創造」と言われる。
- (19) 思考器官から大元素が¹⁷¹生じるのである,人々の王よ。これが,思考器官に由来する「第四の創造」と言われる¹⁷²。
- (20) 音声,接触,色,味,香が,元素に由来する「第五の創造」であると,元素を考察する人々 (bhūtacintakāḥ) は言った。
- (21) 耳,皮膚,目,舌,そして五番目として鼻,これが「第六の創造」と言われ,多くの思考を本質とする (?)¹⁷³と伝えられている。
- (22) (次に)下方に動く (?) 感官の群が生じるのである¹⁷⁴,人々の王よ。これが「第七の創造」と言われ,感官に由来する創造と伝えられている。
- (23) (次に)上方への動き¹⁷⁵と横への動きが生じるのである,人々の王よ。これを直線的な¹⁷⁶「第八の創造」と賢者たちは¹⁷⁷言った。
- (24) (次に)横への動きと下方への動きが¹⁷⁸生じるのである,人々の王よ。これを直線的な「第九の創造」と賢者たちは言った。
- (25) これら九種の創造と¹⁷⁹二十四の原理が,人々の王よ,天啓聖典に従った説明によって述べられた。

¹⁷¹ mahābhūtā(h) Cp. mahābhūtāḥ, puṁstvam āṛṣam / (mahābhūtāḥ と, 男性形なのは古形である)

¹⁷² P. etan mānasam paricakṣate B. etan mānasam viddhi me matam K. etan mānasam cintātmakam

¹⁷³ bahucintātmakam N. bahucintātmakam mānasam ity arthaḥ (bahucintātmakam とは, 精神的な, という意味である) Edgerton[1965]: Because these senses arouse desire and aversion. (p.324,fn.3)

¹⁷⁴ adah śrotrendriyagrāma utpadyati Cv. adhaḥ srotaḥ, sraṇaṇam yeṣāṃ tāni indriyāṇi upasthapāyupadākyāni / mūtrasya puriṣasya pādasamcarāṇasya ca adha eva vyāpāradarśanāt / (adhaḥ srotas とは, 性器・肛門・足と言われる感官の流動のことである。小便・大便・足による歩行は, 下方にのみ動きが見られるからである) 次の第 23 詩節を考慮すると, śrotra は srotas の誤記でないか。ここに śrotendriya 耳が登場する理由がない。Cf. Edgerton[1965]: the true reading is *adhaḥsrota-* (with irregular saṁdhi for *-srotas*). (p.324,fn.4)

¹⁷⁵ ūrdhvasrotas Cs. ūrdhvasrotaḥ, sargo devasargah, tiryaksroto manuṣyādisargah / (ūrdhvasrotas とは, 神々の創造であり, tiryaksrotas とは, 人間などの創造である) Cv. ūrdhvaṃ cādhas tiryag ity anena pāṇindriyam ucyate / hastābhyāṃ śīraḥkaṇḍūyanasya pādakaṇḍūyanasya pārśvakaṇḍūyanasya ca darśamāt / (「上方・下方・横方」によって, 手という器官が言われている。両手で, 頭を掻くこと, 足を掻くこと, 脇を掻くことが見られるからである)

¹⁷⁶ āṛjavam Cn. āṛjavakam, rjuvṛtīḥ, viśeṣān ākrāntasāmānyavṛttir iti yāvat / (āṛjavakam とは, 直線的な作用であり, 個々(の感官)を超えた共通の作用という意味である) Cs. āṛjavakam, rjubhāvena jātam / (āṛjavakam とは, 真っ直ぐな状態で生じた, という意味である)

¹⁷⁷ P. āṛjavakam buddhāḥ B.,K.: āṛjavakam smṛtam

¹⁷⁸ tiryaksrotas tv adhaḥsrota(h) Cv. tiryaksrotam adhaḥsrotam ity anena vadanendriyam ucyate / vadanasya ubhayapārśve adharoṣṭhadvārā ca vadanalālājalasya sraṇaṇadarśanāt / śīśau vāgindriyavyāpārasya śabdoccāraṇasya pāyvädicaturindriyavyāpārād apy anantarabhāvitvāt vyutkrameṇa karmendriyasṛṣṭikathanāt / (「横への動きと下方への動き」によって, 口という器官が言われている。口の両脇で, そして, 下唇を通して, 口中の唾液の流出が見られるから。子供においては, 言語器官の働きである音声の発生は, 肛門などの四つの器官の活動からすぐ後にも生じるので, 順不同に行為器官の創造が語られているために(手の後に口が述べられている))

¹⁷⁹ P.,B.: etāni nava sargāṇi K. ete vai nava sargā hi Cn. sargāṇi, klīvatvam āṛṣam / (sargāṇi と中性形なのは古形である)

茂木

- (26) さて次に、偉大な王よ、この(創造の)種類に関して (guṇasyaitasya)、偉大な人々によって正しく述べられた時間の計量 (kālasaṃkhyā) について、私の言うことを聞かべし。

(平成27年 1月 8日 受付)
(平成27年 3月 5日 受理)